

〈退職記念講義〉

1850年代の3つのドイツ教養小説

竹治 進

〈はじめに〉

講義に先立ちまして、今日このような場で退職記念講義をする機会を与えてくださいました法学部教授会ならびに法学会の学生・教員の皆様、いろんな準備をしていただいた職員の皆様、そしてここにお集まりいただきました方々に感謝申し上げたいと思います。また、紹介のお言葉をいただきました竹濱学部長はじめ司会をお引き受けくださいました石原さん、研究紹介の労をおとりくださいました松尾さんにも改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

〈時代背景と教養小説〉

さて、今日はここに書いてあるようなタイトルでお話をさせていただくのですが、このタイトルにはキーワードが2つあります。ひとつは1850年代という時代、もうひとつはドイツ教養小説です。時代と文学とのかかわりを抽象的一般的にではなく三月革命後のドイツにおける3つの教養小説を比較することによって具体的に浮かび上がらせることができたらと考えています。

と申しましても、時代状況についても教養小説についても詳しくお話しする余裕はありません。ごく簡単に極めて常識的な点だけを押さえて、あとは、個々の作品についてお話しする中で触れることにして、できるだけ多くの時間を作品のほうに充てたいと考えています。

1850年代とはどういう時代であったかに少しだけ触れておきます。レジュメにも書きましたように、1850年代というのは三月革命直後の時代

です。1848年の三月革命は、メッテルニヒのロンドン亡命に象徴されるような当初の華々しい成果にもかかわらず保守派の巻き返しが成功して結局は革命側の敗北に終わりました。ドイツ憲法を立案したフランクフルト国民議会がプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世に申し出たドイツ皇帝の王冠も拒否され、課題であり念願であったドイツ統一の試みも頓挫したままの状態にあります。市民階級は政治の実権を握ることなく、旧体制との妥協のなかに自らの生きる道を模索することになりますが、他方、この時期ドイツはめざましい産業の発展を遂げる。鉄道の敷設が進み、それと連動して石炭と鉄の生産が飛躍的な伸びを見せ、多くの株式会社が設立される。その時代の中で人はどのようにしてアイデンティティーを見出すのか。後に教養小説と呼ばれることになる小説タイプはまさにその問題と取り組むことになるのです。

では次に教養小説とは何か、の問題です。教養小説とは、読者の教養を高めることを目的とした小説ではありません。教養小説はドイツ語で **Bildungsroman** といいます。**Roman** というのは「長編小説」という意味で、**Bildung** が「教養」と訳されている部分です。なにかを形作ること、形成を意味します。混沌とした原料・材料から形や色をそなえた具体的ななにかを形作ることです。そのなにかとは物であってもよいが、人間であってもよいわけです。人間形成というわけですね。したがって **Bildungsroman** とは人間形成長編小説とでも訳せばドイツ語に沿った訳語になるのかもしれませんが、しかしこれでもいまいよく分かりません。

この語をドイツの精神史の中で自覚的に位置づけて使った最初の人は哲学者のディルタイであると言われています。彼は『シュライアーマッハーの生涯』という著作の中でゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』がさまざまな段階、さまざまな形、さまざまな時期における人間形成を示していると指摘し、その流れを汲む小説を教養小説と名づけました。また、『体験と創作』という著作の中で次のように教養小説を

定義しました。「青年が幸福な薄明のうちに人生に足を踏み出し、近しい魂を求めて友情と愛に出会う。しかし、やがて世間の厳しい現実と戦うこととなり、さまざまな人生体験を経て成熟し、自分自身を見出し、世界における自分の使命を自覚するようになる」。

教養小説については以上のようなおおざっぱな了解の上に立って次に進みたいと思います。今日お話しするのは次の3つの小説です。

グスターフ・フライターク 『借方と貸方』 1855

アーダルベルト・シュティフター 『晩夏』 1857

ゴットフリート・ケラー 『緑のハインリヒ』 1854/55

これらはいずれも少年期から青年期に至る若者を主人公とし、彼らが親元を離れて親以外の人々と出会い、その影響を受け、導かれ、恋愛をし、成熟を遂げる、あるいは挫折する過程を描いています。今日はこの3つの小説のなかでも特に『借方と貸方』について多少詳しくお話をすることもです。本来ならば3つともきちんとあらすじを紹介すべきなのですが、なにしろどれもかなり大部のものでして、それぞれ千ページ近くある。これを1時間少しで全部紹介するのは不可能です。それで『借方と貸方』に比重を置いた説明をさせていただくこととします。その理由は2つあって、ひとつには、皆さんがこの小説に触れられるのは今日が初めて最後になる可能性が極めて高いからです。他の2つの作品は日本語訳が出ています。簡単に手に入りますので、今日の私の話を聞いてもし興味を持っていたら是非お読みください。『借方と貸方』を詳しく紹介するもうひとつの理由は、この小説を論じることがそのまま当時の社会状況を論じることにつながる、という点にあります。それほど直接的に、あるいは表立ってという言い方がよいかもしれませんが、この小説は発表当時のドイツの歴史状況と関係しています。それも意図的に、です。

『借方と貸方』

では『借方と貸方』です。主人公はアントン・ヴォールファールトといます。物語は彼の出生と子ども時代についての手短な報告のあと、少年時代の終わりに両親が亡くなった時点から本格的に展開します。首都にある商事会社シュレーター商会に見習い修業に入ったアントンが経験を積みながら有能な社員へと成長し、指導的人物である経営者トゥラウゴット・シュレーターと行動を共にし、ポーランドで暴徒に襲われた彼の命を救うとか、一方で彼と衝突して一時会社を離れるなどの紆余曲折を経て、最後にトゥラウゴットの妹ザビーネを妻とし、同時に商事会社の経営者たる未来の展望が開けたところで終わります。

そのような教養小説的展開を支えるために様々な人物と事件が配置されています。主要な登場人物として勘定できるのは20人程度であり、彼らは3つの社会階層に分類することができます。市民、貴族、ユダヤ人です。この3つの階層が経済活動を通じて出会います。市民は商業活動の王道を行き、自己と世界の調和をはかり、社会の発展に寄与する。貴族は経済的逼迫を切り抜けるべく祖先伝来の財産を工業生産に投資して生き延びようともがくが、結局はうまく対応できず経済発展に取り残される。そしてユダヤ人はといえば、きわどい商売でひたすら利益を追い求め、策略をめぐらして無能な貴族から金をむしり取り、ついには犯罪に手を染めるが、市民と対立し、滅びます。

市民対貴族、市民対ユダヤ人の2つの対立関係が見られるのですが、より先鋭な対立は後者のほうです。そのことを端的に示すのは主人公アントンに対して配置されたユダヤ人ファイテル・イツィヒという存在です。このファイテルは故郷の小学校でアントンの同級生であり、アントンと同じ日にやはり首都へ向けて旅立ち、自立の道を求めます。アントンがシュレーター商会に見習いとして入ると同じ日にユダヤ人商人ヒルシュ・エーレンタールに雇われる。このような図式的な人物配置はも

ちろん意図的になされているのであって、アントンとファイテルは光と影の関係のなかでそれ以後対照的な道を歩むこととなります。

ファイテルはエーレントールにこき使われつつも自分で古着を商ったり馬商人の代理人を勤めたりしながら金を貯め、故郷を出るときに母親がくれた6ドゥカーテンを1年で30倍に増やします。それにとどまらず、身を持ち崩して今は裏社会の法律顧問となっている元弁護士ヒップスという男に弟子入りし、商売に必要な法の知識を表と裏の両面に渡って獲得します。抜け目なさや我慢強さ、それに勤勉さによってお金をためた彼はついには自立した商人となり、元雇い主のエーレントールを含むユダヤ人を陰で操るフィクサー的存在となり、貴族ロートザッテル男爵の財産を巻き上げる陰謀の中心人物となります。そして、かつての師匠であったヒップスを使って男爵の有価証券を盗み出すという犯罪にまで走ってしまいます。そしてエーレントールの娘ロザリーエと婚約をします。これはどちらからの愛もない、ただファイテルが己の勝利を誇示するためだけにする婚約です。さらに、アルコールに溺れて今や役立たずになってしまったヒップスによって悪事が露見することを恐れたファイテルはヒップスを司直の目の届くところから遠ざけようとした際、怯えて制御の効かなくなったこの男を川に突き落として溺死させてしまい、こうして彼は殺人犯にまでなってしまいます。そして最後には、彼自身が警察の追及を逃れて逃亡を図る途中、増水した川に流されて死ぬのです。

このように人間の暗黒面がすべてファイテルに押し付けられているのと対照的に、主人公アントンには明るい面ばかりが振り分けられています。小説の冒頭で彼は「高等小学校でもギムナジウムでも他の生徒たちの模範であり、家族の誇りであった」と紹介されます。これが基本線であって、彼はその後の人生においても優等生の枠をはみ出ることはありません。貴族の世界に少し幻惑されるという迷いはあっても基本的には決し

て道を踏み外さず、人生の栄冠めざして突き進むのです。最後に、アントンには輝かしい未来が授けられ、ファイテルには死が下される。アントンとファイテルとは完璧な陽画と陰画の関係にあるといえます。

しかし、ちょっと不思議なのですが、教養小説の体裁とは裏腹に、人格的發展につながるような主人公の心理も変貌も描写されていません。主人公は最初から模範的な人物として設定されているので変化しようがないのです。むしろ主人公に対置された人物の心理と変貌がよく描かれている。これが『借方と貸方』の人物に関して確認できることです。では、人物と並んで物語を支えるもう一方の要素である事件のほうはどうなっているのでしょうか。次にそれを見てみましょう。

この小説は全体で6巻からなります。そのうち第3巻の前半半分と第4巻と第5巻の全部、そして第6巻の最初の部分がポーランドを舞台としていて、ポーランドにおける出来事が大きな部分を占めています。ポーランドで起きた暴動に対して勇敢に戦うドイツ市民が描かれます。その先頭に立つのはもちろんアントンであり、彼は2回ポーランドに出かけます。1回目はポーランド人に奪われたシュレーター商会の商品を取り返しにシュレーターとともに出かけ、商品と一緒にシュレーターの命をも救うという殊勲を立てる。2回目は、ドイツにある領地を失い、代わりにポーランドの荒れた土地を得たロートザッテル男爵の全権を委託されて先遣隊として出かけ、男爵一家を迎える準備をします。この直前に彼はシュレーターと決別しているわけですね。男爵一家が到着したあとはしばらく彼らのもので働くが、アントンの尽力を認めない男爵と折り合うことができず、貴族は市民を認めるつもりがないことを知り、そこを去ります。それによってかつてのシュレーターの貴族批判、シュレーターはアントン相手に厳しい貴族批判を展開し、それでアントンは彼と決別したのですが、その貴族批判の正しさが証明されたこととなります。ドイツへ戻った彼はシュレーターと和解し、商会の後継経営者として迎え

入れられ、その妹ザビーネを妻とするというところで小説は終わります。

2回に渡るポーランド滞在を通じて明らかになるのはアントンの有能さと勇敢さです。彼はポーランド人の暴徒からドイツ人の命と財産を守るために八面六臂の活躍をします。とりわけ2回目の滞在は1年に及び、その間、城を修繕したり荒れた土地を測量し耕地へと作りかえる計画を立てたりします。また、ポーランドの地ではばらばらになっていたドイツ人をまとめるためにリーダーシップを発揮します。その活動の精神的バックボーンになっているのがポーランド人に対する優越感とドイツ市民としての自覚です。アントンは1回目のポーランド滞在中に、スラブ人ほど進歩する資質、自分の資本によって人間性と教養を獲得する資質に乏しい人種はいない、彼らは市民階級を持たない、と語り、これに応じてシュレターも、市民階級を持たないことすなわち文化を持たないことだと語っていました。2回目の滞在中にアントンはこの確信をさらに強めます。友人に向かって彼は、劣弱な人種であるポーランド人からドイツ人が自由な労働と人間的な文化という平和的手段によって土地の支配権を獲得し、彼らを支配するのはまったく正当なことであり、自分はそのような征服者の一人、*Eroberer* という語を使っていますが、征服者としてこの土地にいるのだ、と宣言します。ポーランド人はドイツ人の持っている教養と勤労意欲と信用のおかげを蒙っているのだから、彼らにはドイツ人に感謝こそすれ恨む筋合いはないのです。これは、フレデリック・バイザーというアメリカのドイツ思想を研究している人なのですが、その人が指摘する100年前にフリードリヒ大王がポーランドを侵略したときの意識と全く同じです。「1757年にフリードリヒ2世はシュレージエンに進軍を開始したが、多く的人是初期の勝利を啓蒙の勝利であると受けとった。プロイセンの君主は啓蒙を広め、遅れた地方に進歩をもたらしているように見えたのである」というのです。

この小説のハイライトといってもよいこのポーランドの暴徒との戦い

は第5巻をまるごと使って描かれています。なかでもその中心は、男爵の城を砦として籠城したドイツ人がそれを包囲するポーランド人を迎え撃つ場面です。大鎌と銃とで武装した包囲軍は馬車に薪を積み、それに火をつけて突っ込んできて、はしごと斧で城への突入を図ります。この攻撃はかろうじて食い止めたけれど、消火に水を使い果たしたために水の蓄えが尽きます。敵が再び攻撃の構えを見せ、万事休すかと思われたそのとき、ドイツ軍が到着し、ドイツ人の命も財産も救われるというわけです。まるで西部劇です。

ここではポーランド人は一貫して道徳的に墮落し、酒飲みで、だらしない生活を送っている暴徒として描かれています。西部劇でインディアンが悪者であるのと同じです。しかしこれは、18世紀から19世紀にかけてのポーランドの歴史とは異なるイメージを提供するイメージです。当時のポーランドはオーストリア、ロシア、プロイセン領に分割され、それはもちろん武力の行使によって行われたわけで、アントンの言うように文化によってではありません。それに対して民族自立の意識が高まり、じっさいに反乱も起こっていた時期です。ポーランド人の反乱は支配者に対する抵抗であったにもかかわらず、ここではその政治的意味が捨象され、低劣な人間どもによる暴動へとすりかえられてしまっています。大鎌を振りかざす暴徒のイメージは大鎌を振りかざして人間の命を刈り取る死神のイメージを呼び起こします。そのような操作によってポーランド問題の非政治化した描写が完成し、結果としてドイツ民族の優秀さとプロイセンによるポーランド植民の正当性が主張されているのです。

なぜこんなことになるのか。それを解く鍵としてユリアン・シュミットから借りてきてこの小説の冒頭に掲げられている標語に注目したいと思います。それは次のように言っています。「小説はドイツ民族をその有能さが現れているところに、すなわち労働しているところに求めるべきである」。

ユリアン・シュミットというのは誰かといいますと、フライタークと共同で『国境の使者』Grenzboten という週刊の政治・文芸誌を編集していた評論家・批評家です。つまりこの二人は志を同じくする同志です。1841年に創刊されたこの雑誌は、編集をシュミットとフライタークが引き受けた1848年以降、ドイツの文学シーンにおいて反ロマン主義の論陣を張り、リアリズムを喧伝しました。政治思想においてはオーストリアを排除してプロイセンを中心にした小ドイツの考え方、立憲君主制によるドイツの国家的統一をめざす穏健自由主義の立場に立っていました。三月革命後に反ロマン主義と穏健自由主義を結びつけたことがこの雑誌の本質的特徴です。文学評論はユリアン・シュミットが主として担当しました。彼の理論を見ていきたいと思います。

われわれの時代のロマン主義的幻想を解体することが『国境の使者』の主要な任務であるとシュミットは言っています。彼によるとロマン主義のキーワードは「主観主義」「ディレッタントイズム」「調和の欠如」「病気」「気まぐれ」「詭弁」「不道德」「抽象」「超自然」などです。ロマン主義の現実離れを批判したのはしかし、シュミットが最初ではありません。ヘーゲルは『美学講義』のなかでロマン派をたびたび揶揄していますし、ヘーゲル左派もロマン派批判の論陣を張っています。パリにいた詩人ハイネも『ロマン派』という本を書いて、ロマン主義者たちが現実に背を向け、カトリック的中世に逃げ込もうとしていると厳しく批判しました。であるならば、『国境の使者』はハイネを評価してもよさそうなものですが、事態は全く逆であって、ハイネも批判の対象となりました。シュミットは「ハイネ自身が常に彼の思想の中心点であり、それゆえ、彼は長い間病的な狂気の中にくらした」と決めつけています。結局ハイネも自我崇拜、主観的虚栄といったロマン主義的病気にかかっているということになるのです。

シュミットもその一員であるところの自由主義的なドイツ市民階級に

とって三月革命の敗北は市民階級の敗北などではなく、ドイツ人の精神に深く根付いた観念性や空理空論、空想癖、現実離れした理想追求、抽象、自我崇拜など、一言で言えばロマン主義の敗北に他なりませんでした。アウグスト・ルートヴィヒ・フォン・ローハウは1853年に公にした『現実政治の諸原理』、これはドイツ自由主義の古典のひとつとなったと言われる本ですが、そこで、観念的なものはそれ自体として力を持たずそれゆえ非現実的であるとしてこれを拒否し、力だけが歴史を作ると述べています。三月革命における民主主義者の間違いは理念や原理の独立した力を信じた点にあるとも言っています。また歴史学者のマックス・ドゥンカーは48年以前に若者の頭を満たし、ゆがめていた哲学の空想的理想主義の代わりに歴史の現実的理想主義を置くべきだと言っています。

ハイネ以外にもヘッベルやビュヒナーといったロマン派とは何ら関係のない文学者たちがシュミットによって槍玉に挙げられ、ロマン主義の汚名を着せられています。ヘッベルなどは「彼のミューズは至る所で、死体を掘り返すハイエナであり、彼の全世界は死臭に満ちている」などと、ひどいことを言われています。シュミットのロマン主義批判は、シュレーゲル兄弟やノヴァーリス、アルニムやブレンターノやホフマンといった一昔前に活躍した本来のロマン主義者よりも、むしろ同時代の文学者において現れ出たロマン主義的あり方と彼が考えるものに向けられた時のほうが過激になります。また、そのときのほうが彼の思想もより鮮明になります。

同時代の小説家カール・グツコウの作品『精神の騎士たち』、これは4千数百ページにおよぶ大長編でして、私も読む勇気がわいてこなくて未読です。退職してから読みたい本のリストに載せてあります。それはさておき、その長編小説を批判した文章の中でシュミットは次のように言っています。「われわれの境遇のてんでんばらばらにもかかわらず、個人がそのなかで自己を主張し、自己をさらに形成することのできるひとつの

全体に加わりたいという深い欲求を感じることは事の本来である。しかしこの全体は、個人の恣意を助長するのではなく、厳しい訓育によって抑制する性質のものでなくてはならない。「エゴイズムに対する決然たる闘争」が必要であり、それは「献身的労働と自己否定的謙譲によってのみ遂行される」。また他の箇所では、個人は犠牲の理念と目的にかなった活動に従うことによって大きな全体の一員として価値ある存在になる、とも言っています。このような精神態度をシュミットは志操 *Gesinnung* と呼び、ロマン主義的自我崇拜、自己神格化に対置しているのです。

シュミットが大きな全体と呼んでいるものが何であるのか。個人がそこに加わりたいと願い、目的にかなった献身的な活動によって奉仕すべき全体とは何かといえば、それはつまり国家です。彼は次のように言っています。「あらゆる詭弁や気まぐれを超越したあの普遍的な志操、それが国家の実質であり、同時にあらゆる文芸の土壌である」。

それでは、普遍的な志操をもって国家を担うのは誰かといえば、これもつまり市民 *Bürger* です。「われわれドイツ人にとって唯一の真実はわれわれの市民生活である」と彼は明言しています。フランス語のブルジョワも市民を意味しますが、しかしシュミットはドイツ語の *Bürger* とフランス語の *Bourgeois* を区別します。両者は経済活動に従事する点では同じだが、ブルジョワが功利主義的な俗物であって、金儲けを自己目的とするのに対して、ビュルガーは倫理的共同体である国家のために労働をつうじて貢献する存在である、という具合に使い分けがなされています。かといって市民 *Bürger* は職人や労働者でもないのです。シュミットは労働 *Arbeit* という言葉をよく使います。しかしこれは労働者 *Arbeiter* の労働ではなく、ましてやプロレタリアートの労働を意味するわけではありません。「献身的な努力」というような意味で使われていて、経済現象というより倫理的態度というべきものです。「誠実」「有能」「徳性」の同義語です。

ここでもう一度先ほどのシュミットの言葉を引用します。「あらゆる詭弁や気まぐれを超越したあの普遍的な志操、それが国家の実質であり、同時にあらゆる文芸の土壌である」というやつです。最後の部分に注目してください。志操 *Gesinnung* は国家の実質だけではなくあらゆる文芸の土壌なのです。これに従えば文学のテーマは志操であり、国家のために役立つという志と操をもった市民こそが主人公でなければならないということになるでしょう。グスターフ・フライタークが盟友ユリアン・シュミットの標語「小説はドイツ民族をその有能さが現れているところに、すなわち労働しているところに求めるべきである」を自分の小説の冒頭に掲げた意味もここで明らかになります。有能で一途で誠実でなければで献身的労苦をいとわない若者が両親亡きあと都に出て見習い修業に入り、商人として出世し、ポーランドの地でドイツ市民たる自覚と誇りをもってドイツ民族の利益のために活躍する物語。『借方と貸方』は、三月革命後における自由主義的ドイツ市民階級の手本を提示しようとする小説だったのですね。

『晩夏』

オーストリアの作家アーダルベルト・シュティフターはこの小説を「貸し本屋の肥やし」*Leihbibliotheksfutter* と呼んで軽蔑しました。この *Leihbibliothek* は「貸し出し図書館」と訳すよりも「貸し本屋」と訳した方が事実に沿っていると思いますので、そう訳しておきますが、シュティフターは『借方と貸方』を「貸し本屋の肥やし」と軽蔑的に呼び、そして自分は『晩夏』*Nachsommer* を書きました。

『晩夏』の主人公はウィーンの裕福な商人の息子ハインリヒで、両親は健在です。妹が1人います。遺産の相続もあって食うに困らない彼は地質学の研究に専念するといううらやましい身分です。ある日、調査旅行の途中で嵐を避けるために立ち寄った屋敷はバラの花が咲き誇り、彼は

「バラの家」と名づけます。この家の主人リーザハの自然、学問、芸術に対する尊敬の念と造詣の深さにとらえられたハインリヒは彼と親交を結び、その指導の下に自然、学問、芸術に対する理解を深めてゆきます。

リーザハは、今は引退しているがかつては官吏として国政において高い地位を占め、功績により男爵の位を与えられた人間です。ハインリヒは、毎年バラの季節にこの屋敷を訪ねてくる母と娘、マティルデ、ナターリエとも親しくなり、やがてナターリエを愛するようになります。そして何年か後、マティルデの屋敷で最も美しい美術品である泉のそばのニンフ像の下で二人はお互いに愛し合っていたことを知り、永久の愛を誓い、この結びつきはハインリヒの両親、マティルデ、リーザハの祝福を受けます。

このときになって初めてリーザハは自分とマティルデの関係を自分の生い立ちも含めてハインリヒに打ち明けるのですが、これは小説も最後の方です。亜麻布商人の息子として生まれた彼は学校へ入る前の年に父親を亡くし、官吏になるべくウィーンに出て家庭教師で口を糊しながら法学を学ぶのですが、母と妹を相次いで亡くし天涯孤独の身となります。裕福な家の住み込み家庭教師としてアルフレートという少年の世話を見ることとなった彼はこの少年からは兄のように慕われ、父親と母親からは絶大な信頼を得、再び家族を得たかのような満ち足りた日を迎えるのですが、アルフレートの姉のマティルデと深く愛し合うようになり、そのことを彼女の両親に告げた彼は彼らから拒絶されます。リーザハはこの家を立ち去り、勉学に励み、官吏となって勤務に邁進し、高い地位と収入を得るまでになります。結婚もしたが、それは彼自身の言葉によると、互いの尊敬はあるが愛情のない結婚生活だったのです。その結婚生活も妻の死によって2年で終止符を打つ。互いの尊敬の念があれば上等だと思ってしまうのですが、それだけでは不足ということみたいです。本来、官吏の仕事よりも学問と芸術に関心のあった彼は職を辞し、田舎に引きうつり

「バラの家」に住みます。かなりの年月を経たある日、マティルデが「バラの家」を訪れ、かつての自分は間違っていたといて赦しを乞うのです。彼女も結婚し2人の子供をもうけたが、また、夫はよい人であったが精神的なつながりは得られなかったと、これもマティルデの口から語られます。夫も、両親も、弟のアルフレートも亡くなり、今や娘ナターリエと息子グスターフだけが残された身内です。ともに配偶者を亡くして再会したリーザハとマティルデの間にかつての愛情に源を発する精神的なつながりが結ばれ、子供のいないリーザハは自分と同じ名前のグスターフ、同じ名前だったのですね、そのグスターフを養子にします。再会後なぜ結婚しなかったのかとのハインリヒの問いにリーザハはその時期は過ぎ去ったと答えます。彼らの夏はすでに過ぎ去り、いまや晩夏の幸福が彼らに与えられ、自分たちはそれに満足しているというわけです。そしてリーザハは自分たちに与えられなかった幸福を得ようとしているハインリヒとナターリエを祝福するのです。

この小説は奇妙な小説です。普通私たちが小説から期待するような要素がありません。事件は起こらないし、人間と人間の対立もなければ心理的葛藤もない。それらがみられるのはリーザハの物語においてだけです。この小説は第1巻7章、第2巻5章、第3巻5章、合計17の章からなるのですが、リーザハの物語は第3巻第3章の終わりと第4章の全体を占めるだけであり、分量としては作品全体の1割そこそこです。じゃ、あとは何が起こるのか。何も起こりません。本当です。家や庭の様子が事細かに描写されます。1階にはどんな部屋があってどのように飾られていて、見事な大理石の階段を上がれば2階はどんな様子で、壁にはどんな絵がかかっているとか、庭には小鳥をよび寄せる工夫が施されていて、小鳥たちがやってきてはどんな様子で餌をついばむとか、それが害虫を駆除するのにいかに適した方法であるとか、といったことです。あるいは、地方の古い教会を訪れて美術品を鑑賞し、それについて意見を交わしス

ケッチをしたとか、立派な大理石を見つけ、それをどのようにして化粧板に加工しようとしたとか、食卓には誰と誰がどのように並んですわってどんな会話をしたとか、ツイターの名品を入手し、名手から手ほどきを受けて上達し、妹にも教えてやったとか、そういったことが語られます。

ヘッベルが、文学批評専門家以外でこの小説を読み通したことを証明できた人にはポーランドの王冠を約束してもいいと言ったのは有名な話です。彼はまた、シュティフターが想定していた読者はアダムとイブである、ここに延々と描かれている事柄を知らないのはこの二人だけだとも言っています。こういった悪意のある表現、私、わりと好きです。

ちょっと脱線しますが、このフリードリヒ・ヘッベルはユリアン・シュミットにハイエナと呼ばれたあのヘッベルです。1840年、50年代を代表する劇作家です。生まれたのは1813年です。この年には他にゲオルク・ビュヒナーとリヒャルト・ヴァーグナーも生まれており、ドイツ文化の当たり年です。今年にはヴァーグナー生誕200年に当たっていて、ドイツ各地でさまざまなイベントがあるようです。私はヴェルディの方が好きで、できることならイタリアに行きたいと思いますが。ヴェルディも1813年生まれです。

それはさておいて、『晩夏』に戻り、今日の話のつながりのなかで興味深い点にひとつだけ触れておきたいと思います。ハインリヒがリーザハの屋敷にやって来るきっかけは嵐を避けるためでした。雷雲が近づいてくるのを見たハインリヒは雷雨が避けられないと判断し、見知らぬ家に避難所を求めたのでした。対応したこの家の主人、彼の名がリーザハであるとわかるのはずっとあとのことですが、そのリーザハは、今日は絶対に雨にはならないと断定します。地質学者としての知識と旅行経験に自信を持っているハインリヒは絶対に降ると主張し、二人の意見は対立するのですが、軍配はリーザハに上がり、判断の根拠を説明されたハインリヒは納得し、この問題はひとまず決着します。しかしそこへ至るま

での二人の議論はかなり執拗に記述され、黒い雲の間から稲光がして今にも雨が降りだすのではないかという描写も事あるごとに挟み込まれます。これを単なる天気をめぐっての記述と描写であると解釈するのは無理であると考えるのが自然です。では何かというと、この嵐は人間社会のもたらす災厄の象徴と見るべきだと私は理解しています。

シュティフターはメッテルニヒの息子の家庭教師を3年間つとめました。反動的な政治思想の持ち主ではけっしてありませんでした。政治に対しては控えめな態度を取り続けた人です。それでも三月革命が勃発した最初の頃、ウィーンにいた彼は旧体制の転覆に熱狂しました。フランクフルト国民議会にむけて選挙人にもなりました。しかし当初の熱狂がさめると、これはひとりシュティフターだけのことではないのですが、必ずしも理想どおり進むわけではない革命の成り行きに批判的になり、背をそむけることになります。彼は言います。「私は中庸と自由の人間である。この二つはいまや残念ながら危機に瀕しており、多くの人はただ昔の体制からただ遠く離れさえすれば自由の基礎をいよいよ据えたことになる」と信じている。しかし彼らはそうして自由の反対側に来てしまうのだ」。5月にはウィーンを離れ、リンツに移ります。その地で国民学校視学官となり、以後15年間教育活動に携わります。

小説ならざる小説『晩夏』は時代状況への対応を完全に無視するという形で時代にあらがって書かれた小説です。時代の現実を一切取り込まないぞという決意に満ちた小説です。人々は真空状態のなかで純粹培養された幸福を生きます。彼らを幸福にするのは穏やかな日常生活であり、それに組み込まれた自然、芸術、学問なのです。自然を正しく理解し、芸術と学問に励み、美を感じる感性と知識を持った人間が幸福になれるのです。『晩夏』の世界からは貧困、憎悪、裏切り、高慢、差別、諍いといった悪はすべて排除されています。なるほどリーザハとマティルデの情熱は一度は二人を幸福から遠ざけますが、しかしそれも修復され、二人は

穏やかな晩夏の恵みを生きているのです。それぞれの配偶者がうまい具合に死んでくれるなんてあまりにも都合がよすぎるといつてみたって仕方ありません。都合がよすぎることなどシュティフターは百も承知です。「バラの家」を嵐が襲うことはありません。この家こそが幸福を純粋培養するための試験管なのですから。『借方と貸方』が1850年代のドイツでしか書かれ得なかった小説であったのと同じように、『晩夏』も1850年代のドイツでしか書かれ得なかった小説です。

この小説が発表された1857年、フランスにおいて重要な文学作品が2つ発表されています。ボードレールの『悪の華』とフロベールの『ボヴァリー夫人』です。私たちは、ドイツとフランスの文学の隔たりの大きさに唖然とせざるを得ません。しかし、なんとなく納得もできるのですけれど。

ヘッベルがこの小説をけなしたのはすでにご紹介したとおりですが、逆にニーチェなんかは誉めています。彼は、ドイツ語の散文作品で繰り返し読み返すに足るものとして、ゲーテの作品とりわけ『エッカーマンとの対話』、リヒテンベルクの『箴言集』、ユング・シリングの『人生の記』第1巻、ゴットフリート・ケラーの『ゼルトヴィラの人々』、それとこの『晩夏』を挙げています。シュティフター文学を評価する人は意外にたくさんいて、トーマス・マンやヘルマン・ヘッセなどが有名どころです。指揮者のフルトヴェングラーは、ベートーヴェンの第6番シンフォニー「田園」を指揮するにはシュティフターを読んでいなければならないと言ったそうです。でもこれは、ブルックナーを指揮するにはと言ったほうがよりぴったりであったかもしれません。ブルックナーのアダージョ楽章に陶醉できる人はシュティフターのファンにもなれると思います。波長が合うのではないのでしょうか。

シュティフターの最後は悲惨なものでした。かみそりで首を切って意識不明のまま2日後に息を引き取りました。これが自殺であったのか事

故であったのかはよくわからないということになっています。ちなみに、葬儀で合唱を指揮したのはブルックナーです。

『緑のハインリヒ』

さていよいよ最後、『緑のハインリヒ』です。これは他の2つと違って少年時代の物語が半分以上を占めます。こちらの主人公の名前もハインリヒです。『晩夏』と関係はありません。こちらのハインリヒは職人階級の人間です。石工（石職人）であった父は早く亡くなり、母と二人きりの身で、当然貧乏です。父の古着を母が仕立て直したのを着ているが、これが全て緑色なので緑のハインリヒと呼ばれています。

少年ハインリヒは、既存価値や形式的規範、日常的惰性で動いているおとなの社会になじむことができません。また、この世界を作っている大きな存在を畏怖する気持ち、言い換えれば汎神論的な感情は持ち合わせているのですが、それだけにいっそう、形骸化した信仰には反発をします。教育の問題と信仰の問題はこの小説の重要なテーマです。

生活一辺倒の生真面目な女性である母親は生活の苦勞もあり、ファンタジーとは無縁の人です。その欠如を補ってくれるのが古物商の老婆マルグレートです。彼女の存在そのもの、それに彼女の聞かせてくれる話はハインリヒを大いに魅了します。

12才で実科学校に進学したハインリヒは浪費欲と虚勢欲の誘惑に負けて、母が大事にしまっている貯金箱に手をつけますが、全てを金の貸し借りに還元する生徒マイアラインとの付き合いが破局をもたらし、それによって立ち直ることができます。

15才になろうという頃、学校でひとりの教師が生徒たちの嘲笑と遊びの標的となってまともな授業ができなくなり、休職に追い込まれるという事態が発生します。ハインリヒは、生徒たちが休職中の彼に対して仕掛けたデモに偶然加わり、意識しないままデモ隊のリーダーの役割を演

じてしまい、学校から追放されます。

両親の故郷である村を訪れたハインリヒは今までとは違う開放感にあふれた生活を経験し、また2人の女性、アンナとユーディットを知り、どちらにも心ひかれます。しかし、アンナは重い病を得て亡くなり、ユーディットもアメリカに移住し、ハインリヒは孤独のなかに取り残されます。

ハインリヒは画家をめざし、とりあえずハーバーザートという親方に弟子入りをします。しかし、彼のもとで芸術の道を究めることは不可能であることを知ってその工房を去り、次にレーマーという、この町の出身で、イタリアで修業をし、それなりの名声も確立して故郷へ戻ってきた画家の指導を受けます。彼の絵を手本にして練習に励んだハインリヒは進歩を遂げるのですが、実はレーマーは誇大妄想に取り付かれていて、パリに行くと言って立ち去り、どこか途中で精神病院に収容され、間もなくそこで死を迎えます。ここまでの「少年時代の物語」*Jugendgeschichte* です。

その後、ハインリヒは20才でドイツの芸術の都に出て画家をめざしますが、ここからの彼は物語の中心というよりも周囲で起こる出来事の観察者の位置を占めます。エリクソン、リュスという2人の親友を得ますが、彼らの友情はリュスがエリクソンの恋人に懸想したことで破綻します。そのことでリュスを難詰したハインリヒは彼と決闘する羽目に陥り、リュスに傷を負わし、それがもとでリュスは死んでしまいます。エリクソンも芸術の都を去り、またもやハインリヒは孤独のなかに取り残されます。

その彼をさらに苦しめるのがお金の問題です。そもそもハインリヒが故郷の町を出立するときに持っていた所持金は母親が質素な生活のなかで貯めておいた貯金をはたいて工面してくれたものであり、1年の滞在にしか足りないものでした。1年たっても将来の展望が開けるわけでもないハインリヒは帰郷する意志などなく、借金生活が始まります。それでも

切り抜けられなくなったとき彼は母親に助けを請い、母は2年間の蓄えを彼に送ってやります。それも使い果たしたハインリヒは再度母親に無心をし、今度は、母は家を抵当に入れて借金をし、送金してくれます。しかしこれもすぐに消えてなくなり、ハインリヒは家賃さえ払えなくなります。これは、少年時代の浪費癖とそれが引き起こす悲喜劇がここに規模を大きくして繰り返されたということに他なりません。しかし今度はそれが母親とハインリヒの破滅へとつながり、小説の結末で正真正銘の悲劇となるのです。しかしそこへいくまでにはもう少し話があります。

ついに家賃不払いで部屋を追い出されたハインリヒは故郷に向かって歩き始めます。しかし故郷に着く前に、かつてドイツへ行く際に同じ馬車に乗り合わせた伯爵の屋敷に偶然迷い込み、そこに何ヶ月か逗留します。伯爵令嬢ドルトヘン・シェーンフント、実は伯爵の実子でなく養子なのですが、彼女に恋したことも長逗留の原因です。それでも踏ん切りをつけて彼は故郷へ向かいます。しかし、ふるさとの町に着いた彼を出迎えたのは母親を教会墓地に送る葬送の列だったのです。母は借金が返せず、28年住んだ家売って、みすぼらしい住まいに移らねばなりません。そして、自分の教育は間違っていたのではないかという慙愧の念と、息子にひとめ会いたいという思いにさいなまれつつ死んで行ったのです。自分の責任で母を死なせたという深い後悔はハインリヒを打ちのめし、彼の生命力を蝕み、ついに彼も死の世界へと連れ去られます。

以上がお手元のレジユメに書いた梗概をさらに短くした梗概の梗概です。それだけでも先にご紹介した2つの小説とは全く異質な小説であることがお分かりいただけるのではないのでしょうか。ハインリヒは画家になろうとして挫折し、お金のことで苦勞し、結局何者にもなることができず、芸術は彼を救うことができません。飢えたるハインリヒには「1千ものバラ園の香りよりも食べ物のおいの方がずっとかぐわしい」と言われています。

芸術家になれない彼はでは商人になれるのか。もちろんそんなことは絶対に不可能です。この小説のなかで商業活動は好意的に描かれていません。この小説で人間的に描かれている商人は2人だけです。ひとり、ドイツの芸術の都でハインリヒの絵を買い取ってくれる骨董屋の店主で、もうひとり少年ハインリヒをファンタジーの世界へと導いてくれたマルグレートです。しかし、前者はどこか怪しげな人物で、扱っているのはまともな古美術品ではなくキッチュなまがい物です。彼は都で皇太子の婚礼がとり行われた際、家々で飾る旗竿の需要があるのを見越して少々金儲けをするのですが、そのとき竿にペンキで色を塗る仕事をハインリヒに与えてくれ、ハインリヒが一時的に苦境を切り抜けるのを助けてくれます。そして身寄りのないこの男は死後、ハインリヒを遺産受取人に指名してくれるのです。この骨董屋にせよマルグレートにせよ、彼らの商売はあまりまともなものではありません。しかし人間的ではあります。彼らの営みは、利益の追求だけをめざす近代的な商業活動ではないのです。近代的商売人と呼ぶべきは、ハインリヒや彼の母親に金を貸し、取立てる連中です。あるいは、少年時代に自己顕示欲に突き動かされて浪費に走ったハインリヒの同級生たちも同類です。彼らは、ハインリヒが正しくないところから、つまり貯金箱ですね、お金を持ち出していることに気づきながら、見て見ない振りをしてその御利益にあずかり、お金がなくなると、彼から離れて行きます。その様子は、嘘つきの得たものをも、その出所について調べもせずに心安らかに自分のものとするおとなのしたたかな商人のようだ、と記述されています。

しかし彼らはまだましなほうでして、近代的商業活動の否定的側面の権化ともいべき少年が登場します。ハインリヒの1才半年上の同級生マイアーラインです。この少年はハインリヒにお金を貸して、それを二人一緒に使っては、ハインリヒの借方として手帳に書き込み、つまらないものを売りつけたり手伝ったりした分をハインリヒの借方として手帳

に書き込み、自分が小石を枯葉に当てられるかどうかの賭けをしてはうまく当てて、彼は練習していてこういうことが上手なのです、これもハインリヒの借方に書き込むといった具合です。彼の手帳は貸借対照表なのです。ハインリヒの負債が相当額に上ったときマイアーラインはハインリヒの母親に手帳を見せて返済を求めます。母親が取り合わないと、今度は学校でハインリヒに請求しますが、教師に見つかって二人とも叱られ、マイアーラインの手帳は破かれてしまいます。この後、二人が互いにいなくともつもない憎悪はもはやこの世では消え去ることは不可能といった程度にまでなります。じじつ、それはマイアーラインの死によって終わります。学校を出てから持ち前の能力に磨きをかけ、役に立つ、頭がよくて前途有望、上役の覚えもめでたい商館づとめの事務員として働いていた彼は、父親が買い取った建物の改修工事を手伝います。経費節約のために自分も職人たちに加わって働いている最中、塔から落下して死ぬのです。マイアーラインの悲惨な最期は、この小説が利潤追求を旨とする近代の商業活動をいかに否定的に見ているかを物語って余りあるものがあります。マイアーラインはアントンという名前でフライタークの小説に登場していれば幸せな商店主になれたに違いありません。

『借方と貸方』の商業賛美に対して小説『緑のハインリヒ』はこのように明確なアンチテーゼを提示しています。『借方と貸方』を直接批判したという意味ではありません。ケラーがこの小説を読んだ形跡はありませんし、創作時期の時間的關係からしてもそれはありえません。直接の關係がないだけに、なおさらこの対立は本物だといってよいのではないのでしょうか。

では、ポーランド問題ではどうでしょうか。注目したい一文があります。飢えに苦しむハインリヒは生まれて初めて祈りのなかで神様に日々のパンをお願いします。そのときまで彼はパンをくださいと祈ったことは一度もなく、彼の祈りは道徳的事柄における助力とか正義の問題に向けら

れてきたという叙述のあと、続けて次のように言われます。「例えば近年では、神様がポーランド人たちを助け、ロシアの皇帝が危害を加えないようにして下さるように」お祈りしたと。この小説でポーランドという語が出てくるのは多分この1回だけだと思います。この文章は、かすかにではありますが列強によるポーランド分割を批判しているように思えるのです。傾向小説 *Tendenzroman* を書いたつもりはないとケラーはある手紙のなかで言っていますので、このように解釈されるのはありがた迷惑かもしれませんが。

<まとめ>

以上、リアリズムと文学史で呼ばれる時代の小説を紹介させていただきましたが、皆さんはどうご覧になるでしょうか。この時代のドイツ文学は2つの面でマイナーの評価を受けています。ひとつはドイツ文学の歴史の中です。すなわち、近代ドイツ文学を代表するのは18世紀から19世紀初頭にかけての、ゲーテとシラーのシュトゥルム・ウント・ドゥラングから古典主義を経てロマン主義に至る時代、それとリルケやカフカ、トーマス・マン、ホフマンスタールなどが活躍する20世紀の前半です。それには生まれた19世紀中ごろは低い評価しか与えられていません。もうひとつのマイナー面は、イギリスやフランスの同時期の文学と比べてです。一般に、19世紀のイギリスやフランスのリアリズム小説に比べて同じ時期のドイツの小説は面白くないといわれることが多いようです。その理由として挙げられるのは、ドイツの小説は時代の状況、現実社会の矛盾に向き合わないからだという点です。この時期のドイツの代表的な作家であるテオドア・フォンターネは、飢えた子供に囲まれて今まさに死のうとしている貧しい労働者を描くことは文学の仕事ではないとはっきり言っています。フォンターネ自身は産業化の進捗するドイツ社会のブルジョワや貴族の欺瞞、虚勢などをえぐり出す面白い小説を書い

でいて、この言葉だけをもって彼が文学の社会性を否定していると考えられるわけにはいかないのですが、全般的にドイツの小説に社会性の欠如していることは否定できないと思います。芸術の世界は現実の世界よりも高い次元のものであり、芸術は、何もかもがごっちゃになって存在する現実世界から本質的なものを取り出し、それを純粹なものへと変容させなければならないとする伝統的な考え方はリアリズムの時代にあっても否定されませんでした。一方で現実は大それたといながら、他方で、ありのままの現実を描くことは否定するという不徹底性がこの時代のドイツ文学を性格づけているのです。それはそれでまた面白い問題ではあるのですが、今日はそれに触れることはできません。

もし今日の私のお話に多少とも興味をお持ちくださったなら、ご紹介した作品を是非お読みいただきたいと思います。『晩夏』はちくま文庫で2冊、『緑のハインリヒ』は岩波文庫で4冊です。『借方と貸方』は昭和18年に、私もまだ生まれていませんが、『アントン物語』というタイトルで3分の1程度が訳されています。小堀甚二というプロレタリア作家が訳しています。この人は戦後、社会党の創設に参加した人です。奥さんが平林たい子で、こちらの方が有名ですね。離婚しましたが。

『緑のハインリヒ』の翻訳について一言。これは、1879、80年の改訂版の翻訳です。これまでご紹介してきたのは初版です。両者はかなり違っています。一番大きな違いは、主人公が初版では死に、改訂版では死なないという点です。彼は故郷の町で官吏となり、生き続けます。ユーディットもアメリカから帰ってきてハインリヒと再会します。結婚こそしませんが二人は強いきづなで結ばれます。それってまるで『晩夏』のリーザハとマティルデじゃないの、とお思いになるかもしれませんが、しかし、あれほど喜ばしい晩年ではありません。どことなくメランコリーと諦念が漂っています。再会して20年後、ユーディットは子供の疫病がはやっただとき医者に見離された貧しい人々の住まいへ出かけ、死んでしまいま

す。

とはいえ、「少年時代の物語」はあまり変更箇所がありません。それに対して芸術の都に行ってから結末に至るまでの部分は大幅に変えられています。私が今日、初版についてお話したことは「少年時代の物語」に関しては改訂版、すなわち岩波文庫の日本語訳にもほぼそのままあてはまると考えていただいて結構です。

『晩夏』のほうは、これを最後まで読める人は100人中3人でしょう。そのうちのひとは忍耐強い人、次のひとは研究の必要から最後まで読まざるを得ない人、最後のひとりがシュティフターのファンでしょうね。

以前、ドイツ学術交流会の奨学金に応募して試験を受けたとき、面接で、ある先生から、「君は変わっているね、普通はこれこれの作家が好きでその人を研究するのだけれど、君はリアリズム時代の小説がなぜ低い評価を受けているのかに興味があるんですね」と言われ、不思議がられたことがあります。確かにおかしいといえばおかしいのですけれど、私としては、それはそれで面白いのではないかと思っています。もともとドイツ文学に関心を持ったのはリルケの詩に惹かれたからではあるのですが、いつの間にかこうなってしまいました。今後ももう少しこのあたりのことを考えてみたいと思います。

最後に、今日私のお話をお聞きくださった皆様に感謝申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

